

掛中だより

5月号
2010年5月23日



校長室から

目にも鮮やかな新緑が山々を覆い、木々が正に躍動しているという表現がぴったりの森のたたずまいとなってきました。去る5月9日の学習公開、PTA総会にはお忙しい中多数お出かけいただき大変ありがとうございました。PTA総会後には学級懇談そして部活動の説明を行いました。今後とも担任や顧問と連絡をしっかりとっていただき、ご家庭と学校が十分な連携のもと子どもたちの教育にあたりたいと思っておりますのでどうかよろしくお願いいたします。

さて、県の教育委員会では今年度から新たな施策として「ふるまい向上プロジェクト」を立ち上げました。「ふるまい」とは「立ち居振る舞い」の「ふるまい」であり、具体的には礼儀、作法、挨拶、しぐさ、モラル、ルール、躰、道徳、倫理観、生活行動、思いやりの総称を指しています。

これは、小学校入学の時点からコミュニケーション力が不足している子や、基本的行動がとれない子の増加が見られること。さらに、地域社会が生活の営みの中で宿していた教育力が低下する傾向にあることから、今幼児を含めた子どもたちだけでなく、大人も一緒になって「ふるまい」を向上させようとするものです。ここで画期的なことは、単に教育委員会のみがこの施策の推進役となるのではなく、福祉部局などと連携しながら、乳幼児の時期から、事柄によっては出産前から乳幼児とそれを育てる親への取組を強化するとともに、それらの乳幼児や若い親の手本を示す立場にある全ての世代の人たちが一緒に参画して「ふるまい」を向上させるための県民運動として展開されることです。

申すまでもなく、こうしたふるまい向上のためには教育を受ける私たち教職員自らがそれを正すことが必要になってきます。同時にご家族や地域の方々の「ふるまい」も同様に重要になってきますが、このことに関してここでは是非紹介したいことがありました。

それは、5月13日朝の朗読会でのことです。この日3年生は「おかげさま」という絵本を読んでいただきました。少しばかりこの本の紹介をすると、この本はおじいさんとその孫娘の会話で成り立っており、おじいさんが事ある毎に「おかげさまで」と言うので不思議に思った孫娘が「おじいちゃん、おかげさまで、だ〜れ？」と尋ねました。それに対しておじいさんは「ほおお、おかげさまかい。それはだれでもない、生かされていることへの感謝の言葉じゃよ」と答えたのです。始めは「生かされてる？」とその意味の分からなかった孫娘ですが、その後のおじいさんとの会話でだんだんその意味に気づき、おじいさんが亡くなった5年生時には自然と「おかげさま」という言葉が口から出るようになった。という話です。

そして朗読会后、1人の男子生徒が感想を言ったのです（本校では各学年とも毎回1人が感想を言うことになっています）が、その内容は「うちのおばあさんも度々この『おかげさま』という言葉を使うが、この言葉にこんなに深い意味があるとは思わなかった」というものでした。もし、この男子生徒のおばあさんが日頃から「おかげさま」と言っておられなかったら、この生徒はこの言葉の持つ重みに気づくことはなかったでしょうし、そういう意味ではおばあさんの日頃の「ふるまい」が今回この生徒の心を大きく動かしたと言えます。そして何よりこの「おかげさま」の言葉が持つ単に感謝の気持ちだけでなく、他の人や物に対する思いやりや優しさ、さらに謙虚さという心情をも、少なからず影響を与えているのではないかと、この生徒の日頃の学校生活での言動を見ていて思えてきたのです。

「親の背中を見て子は育つ」とは言い古された言葉ですが、「ふるまい向上プロジェクト」を我々大人が自分の背中をもう一度見直す契機とすべきではないかと思っています。